

韋 いへん 編

愛知大学図書館報

No.35

「韋編」……文字を書いた竹や木の札を、なめし皮の紐でとじた上古の書物。

図書館の課題・宿題

図書館長 常石 希望

任期2年間ということで、このたび思いもかけず図書館長の責務を負うこととなった。これに関する個人的な所見は多々存すが、ここでは何よりも先ず今後2年間およびそれ以降に、図書館がなさなければならない課題・宿題について述べておきたい。

*

(一)「名古屋(ささしま)新校舎移転」である。名古屋および車道キャンパス、豊橋キャンパスの一部学部移転、あるいは新学部設置にともない、名古屋(ささしま)新校舎図書館を構築するという課題である。すでに決定済みの限られた新図書館空間を、いかに効率よく、より快適に使用できるようにするのかという課題、あるいは移動書籍の選択とそれに連動する保存書庫の確保、名古屋市との協調に基づく市民開放図書館という概念作りと現実的対応の問題など、課題・宿題は多い。

図書館も移転にとまなうこれら課題を、一定のタイム・テーブルを作成したうえで、スタッフ全員(両館長、車道を含め各学部から選出されている図書館委員、状況にもっとも精通している図書館職員)が、何よりも十分な話し合いを通して、逐一決定・解決していかなければならないと考えている。さらには



* *

出来る範囲内で、「大学図書館」というものの存在意義と現状への再検討、現状における問題点の提起、あるいは他大学の実態調査などを介し、「名古屋(ささしま)新図書館」の構築と維持運営にスタッフ全員で取り組みたいと願っている。

(二)上に挙げた諸点のうち、特に「保存書庫」の設置とその機能充実は、きわめて重要な課題であろう。従来もわが愛大図書館は分散キャンパスという宿命下、三キャンパスの図書貸し出しを集配システムによって対応している。しかし、今後もこの宿命を残したままで、さらに都市型キャンパスという限定空間の問題とも対峙しなければならない。言い換えれば、従来の三キャンパス分散の問題を残しつつも、質の異なる新しい課題を突き付けられたこととなる(もとより、それに伴う大きい成果を期待しつつ)。愛知大学の図書館および各機関の総蔵書数は、すでに約150万冊余を誇る。うち名古屋キャンパスの蔵書数は、約50万冊。名古屋キャンパス3学部の移転にともない、基本的にこれらの大部分が移動する。しかし新キャンパスには、名古屋3学部に加え、豊橋2学部プラス新学部の設置も検討されている。

しかるに新図書館の図書収容能力は、現時点では大雑把な計算しか出来ないが、約50万冊プラスアルファと想定されている。しかも毎年毎年、図書は増え続ける。かかる状況下、大学における知の中心・図書館として急場しのぎではない、総合的かつ長期的なニーズに応える「書庫対策」が求められるのは言うまでもない。

* * *

(三) 他方、図書館の「利用法」という点にも着目したい。これは、けっこう興味を惹かれる課題でもある。以下は、そのための単なる手がかり、あるいは例にすぎないが、思いつくまま2・3の点を述べてみたい。

まず「教員」の利用。実は、教員の多くはあまり図書館を利用しないものだ。本「韋編」の過去号を見ても、従来の館長の多くが「平素、図書館をあまり利用しないのに、館長になるとは…」といった言をのべておられるように、教員の専門研究というのは多くの場合かなりマニアック（よく言えば専門性が高度）であり、愛大はもとより日本でも数名しかいないような細分化された分野をメジャー研究としているケースが一般的であるからだ。ハングル文献の中でも、さらに特殊な分野を扱う私の場合も同様である。そんな特殊文献を、図書館に入れてもほかに誰も利用しないことが分かっている。従って、自分のメジャー研究関係の文献は図書館に入れることを遠慮し、別途個人的に購入し手元に置く。こうしたケースが多く、その結果、教員は「図書館はあまり利用しない」ということになる。

しかしながら、教員の研究も何もメジャー研究だけではない。共同研究など「マイナー研究」にも関わることが奨励されて久しい。こうして、本来の専門を一步退いた共同研究や基礎研究にかかわる場合には、愛大の図書館は実に役に立つ。その分野の蔵書が、優れている。少なくとも、私が関わる思想系列に関してはそうである。そして、かかる「研究基礎分野」の文献とは、同時に「学生の専門

研究」と重複する分野に他ならない。結論的に言えば、「大学図書館」にとって最も重要な「重要基礎文献」の愛大図書館の充実を、教員・学生ともに再認識していただきたいし、この充実を継続する点も課題の一に挙げたい。

* * * *

(四) 最後に、「学生」の図書館空間の利用法について一言。例えば、韓国では図書館の第一義の利用法は、広義の「学習室」である。第一に、個々の学生の学習室としての空間利用である。多くの学生が、勉強の大部分を図書館です。図書館は本を借りる所ではなく、勉強するための場所（本は「借りる」までもなく、図書館内で自由に使える）。そのため都心のほとんどの大学図書館は、夜は12時近くまで開館しており、朝は4時5時から開館する。終電前や始発電車後には、図書館付近は学生が多い。24時間開館の大学図書館もある。館内には軽食コーナーがあり、夜間は様々な自動販売機で自由に飲食も可。図書館と図書館にぎ付近は、大学内でも学生たちで最も賑わう場所の一である。

第二に、韓国では「スタディー」と称される任意のテーマ設定による学生間相互の「勉強会」が盛んで、昨今は図書館が多く利用されると言う。かつては「空き教室」などが、それに当てられていた。しかし現在では「スタディー・ルーム」の名で、どの大学図書館にも付設されている。コンピューターは必ずあり、必要図書も視聴覚設備も備わっている「図書館」の方が、はるかに便利で充実した共同学習が可能となるわけだ。こうした大学図書館の利用法は、恐らくは欧米の大学図書館の利用法に学んだものだろうと言われる。欧米や韓国における、かかる学生の勉強会の場としての「図書館利用」も課題の一である。少なくとも、都市型図書館の長所を生かし、第一の点から十分に検討し活用したい。

(法学部教授)